

数字だけでは逆効果になるかも

感染症予防が叫ばれる中始まった今年度のアルミ缶回収。回収曜日の指定や回収場所の設定など、リーダーたちがアイデアを出してくれたお陰で、これからも取り組みそうですね。

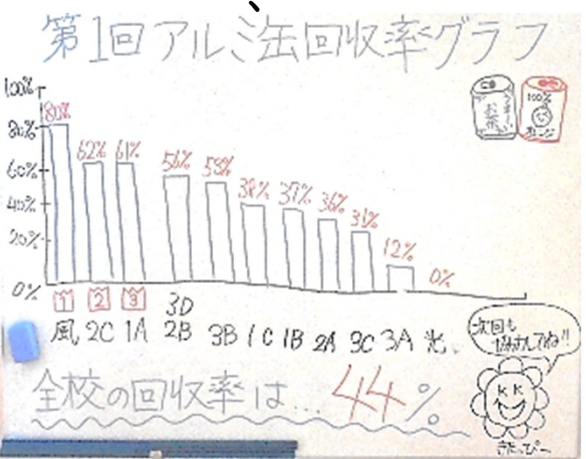
第一回の回収後、写真のような回収率グラフが生徒玄関前に設置されました。これを見た私には、過去の保護者の言葉が蘇（よみがえ）ってきました。

「先生、うちには本当に空き缶がないんです。あればもたせますけど、ないのでたせられません。アルミ缶が要るから、ジュースを買ってこれるんですよ。」

家庭に空き缶がなければもってこられません。しかし、学級ごとに参加率が出てしまいます。仲間は何も言わなくても、参加する生徒が増えれば増えるほど、どんどん肩身は狭くなります。なければ仕方がないのに、空き缶がないことが悪いことのようになってしまおう。数字を提示するだけでは、無言のプレッシャーを与えることになり、アルミ缶回収が暗いイメージに変わってしまいます。

回収率を数字で出すだけでは、逆効果になってしまいます。可能性があります。回収率は、まず分析に使うべきです。第一回の回収時には何か問題はなかっただろうか。3Aと3D、同じ三年生で大きな差があるのはなぜだろうか。2Cや1Aの回収率がよいのは何が原因なのだろうか。光組には期日や方法について周知ができていたのだろうか。……こういう分析を通して、一人でも多くの生徒が快く取り組めるように、改善することが大切です。

生徒の中には、先に挙げたように家にアルミ缶がない生徒もいることでしょう。市の資源物回収に出したばかりだという家庭もあるかもしれない。協力する気はあっても、たまたま忘れてしまったという生徒もいるでしょう。そういう生徒が必ずいると仮定して、どれくらい参加率や回収率が達成できればよしとするのでしょうか。知りたいなあ。



(八月三日 記)